

〔国立政治大学日文学系主催公開講演〕
二〇〇六年一月三日 要旨

『平家物語』における「無常」の表出方法

源頼政の死と平忠度の死との類似と相違

犬井 善壽

〈一〉

西に向ひ、手を合せ、高声に十念唱へ給ひて、最期の詞ぞ哀れなる。

埋木の花咲くこともなかりしに実(身)のなる果ぞ悲しかりける
是を最期の詞にて、太刀の先を腹に突き立て、俯様に貫かつてぞ失せ
られける。¹⁾

『平家物語』巻第四「宮御最期」の章、源頼政の最期を語る一節である。
物語の語り手は、この一節に続き、次のような自己の感想を語る。

其の時に歌詠むべうはなかりしかども、若うより強ちに好いたる道な
れば、最期の時も忘れ給はず。

その歌は、平氏全盛の世にあつて、源氏でありながらその平氏方に身を
置いた自身を「埋木」と捉え、「花咲く事もなかりし」つまり栄華は望むべ
くもなかつたことを思い、こうやうして自害して行くことで「実の成る果て」
つまり更なる栄華はあり得ず、「身」の行く果ては悲しいことよ、と「死」
を見極めた頼政の思いが歌い上げられている。述懐歌の典型である。

治承四年(一一八〇)五月、平氏一族の専横・横暴に対して、保元の合戦・
平治の合戦を通じて平清盛に従い平氏の後塵を拝する他なかつた源氏の頼
政が、高倉宮以仁王を奉じて都で平氏討伐の兵を挙げ、敗北を喫し、近江
の三井寺へ、更に奈良へと逃れ、途次、宇治橋と平等院における合戦にお

いて戦い破れ、自害する、その最期の折に「埋木」の歌を詠む、という、『平
家物語』に語られる頼政の最期譚には、その「死」と「花咲くこと」つま
り「盛」のなかつた「身」の行く末を悲しむ述懐歌という題材によつて、
この物語の貫一主題³⁾である「世は無常である」という、作者が享受者に訴
えようとした思想が、この部分の主題としても示されている。

そのことは、「宮御最期」の章における頼政最期の一件を語る語り方のみ
を取り上げてみても看取できるのであるが、物語の巻第九、源義経を先鋒かつ
大将とする源氏一族と平氏一族との一の谷の合戦における平忠度の死を語
る「忠度最期」の章の語り方と対照し、その類似点と相違点を把握し、
二人の武將の死を語るに当たつての「同じ」表現と「異なる」表現とを、
つまり表現の「一定」と「不定」とを、分析することで、更に鮮明になる。

本稿において、『平家物語』の頼政最期譚と忠度最期譚を読み、それぞれ
における頼政の死の語り方と忠度の死の語り方とを分析し、併せて、両者
を比較対照して、それぞれの部分主題が、そして両者が類似し相違するそ
のことが、物語の貫一主題「世は無常である」と同じ主題を提示している
ということを描き出し、以て、『平家物語』の作者が、物語のどの章どの話に
おいても、時と人と場という題材とそれらを総合した事件に相違こそあれ、
主題「世は無常である」を示している、ということを明らかにする。

検討は、覚一本系統の流れにある流布本の本文に基本的には拠り、異種
本の中でその本文が流布本の対極にあると見てよい延慶本⁴⁾を適宜比較す
る。他の異種本は必要に応じて参照するに留める。数多い異種本の本文を以
てしても流布本に拠る検討と同様の見方が出来る、と判断することに拠る。

〈二〉

頼政が以仁王を奉じ宇治で平氏と戦った折の装束は、「橋合戦」の章に、源三位入道頼政は、「今日を最後」とや思はれけん、長絹の鎧直垂に、科皮緘の鎧着て、態と甲をば着給はず。

と語り手は語る。科皮緘の鎧は藍色革に齒朶の葉を白く染め出した革の鎧で、地味な色調である―延慶本の語り手は「黒革威ノ鎧ヲ着テ」「馬モワザト黒キ馬ニソ乗タリケル」と、馬を含めて黒ずくめ、壮年の強者と敵を欺く出で立ちを強調している―。続いて示される頼政の嫡子仲綱の装束が、赤地の錦の直垂に、黒糸緘の鎧なり。弓を強う引かんが為に、これも、甲をば着ざりけり。

と、黒糸緘という壮年の鎧の緘色ではあるが、鎧直垂は赤地の錦というから若向きの色であるのと対照的である。その頼政・仲綱父子共に兜を着けなかったと語って、両人の必死の覚悟を語り手は強調しているのである。

「官御最期」の章において、橋合戦で負傷した頼政の最期が語られる。

源三位入道は、七十に余りて、軍して、弓手の膝口を射させ、甚手なれば、

「心静かに自害せん。」

とて、平等院の門の内へ引き退くところに、敵襲ひ懸れば、次男源大夫判官兼綱は、紺地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧着て、白月毛なる馬に、金覆輪の鞍置きて乗り給ひたりけるが、父を延さんが為に、返し合せ返し合せ防ぎ戦ふ。

七十余の高齢の頼政は自害を決意して退却し、次男兼綱が、紺地の錦の直垂に唐綾緘の鎧、白月毛の馬、金覆輪の鞍と、目立つ出で立ちで父を援護する。延慶本では、黄の生衣の直垂に赤緘の鎧、白革毛の馬と、更に目立つ出で立ちの兼綱が語られる。頼政の装束と対比して語り手は描写するのである。物語の作者はこのようにして語り手に頼政父子三人を揃えさせる。

尤も、兼綱は、『尊卑分脉』には、頼政の弟頼行の三男、父の死後、頼政の猶子となったとある。その兼綱は、上総太郎に射られ、太郎の侍重次郎丸と組み撃つところを、平氏の兵十四五騎に討たれる。最初の死である。

続いて、語り手は、嫡男仲綱の死を、次のように語っている。

伊豆守仲綱も、さんざんに戦ひ、甚手数多負うて、平等院の釣殿にて、自害してけり。其の首をば、下河辺藤三郎清親、取りて、大床の下へぞ投げ入れたる。

兼綱と仲綱とは父の露払いとして敗死した、と語られるのである。尤も、『源平盛衰記』⁵⁾は、仲綱は頼政の後を追って自害した、と語っているが。

続いて、語り手は、六条藏人仲家と子息仲光の討ち死に触れ、撰津源氏頼光流の頼政が河内源氏頼信流の故帯刀先生義賢の嫡子仲家とその子仲光を養子として扶持したことが与って二人が頼政に従軍したと説明する。二人の討ち死も頼政の死の露払いと語るのである。尤も、延慶本の作者は仲家父子の死に触れない。二人は頼政最期譚にとつて脇筋の人物なのである。頼政の最期は、以上の人々の死の掉尾に、以下のように語られている。

三位入道、渡辺長七唱を召して、

「我が首討て。」

と宣へば、主の生け首討たんずる事の悲しさに、

「仕つとも存じ候はず。御自害候はば、其の後こそ賜はり候はめ。」

と申しければ、「実にも」とや思はれけん、西に向ひ、手を合せ、高聲に十念唱へ給ひて、最期の詞ぞ哀れるなる。

以下、本稿の冒頭に引いた「埋木の」の歌をめぐる語りが続く。延慶本では歌の末句が「哀ナリケル」とあるが、その意味する所は変りがない。

次の一節を以て頼政の最期の話が締め括られる。

其の首をば、長七唱が取りて、石に括り合はせ、宇治川の深き所に沈

めてけり。

延慶本には、穴を深く掘って埋めるが平氏の軍兵が掘り起こした、とある。

頼政の最期を記す史料として、『百鍊抄』治承四年五月二十六日条に、

廿六日。三条宮（以仁王。稿者注）、率頼政已下武士、赴南都。官軍追。

至於平等院、合戦。宮井頼政法師已下党類、伏誅。

とある。また、『玉葉』の五月二十六日条には、檢非違使庁源季貞が平宗盛の使者として後白河法皇に報告したこととして、平氏三百余騎によつて、

頼政党類、悉誅了。其次第、……戦於宇治橋、……逆徒悉被擒殺。

とある。『山槐記』五月二十六日条には、合戦の報告を聞いたこととして、

於平等院前合戦、景家（飛驒守、藤原氏、平氏の將。稿者注）、得頼政入道頸、忠清（上総守、景家の兄。稿者注）、得兼綱（大夫尉）頸。平等院廊自害者有三人。其人一人、着淨衣。無頸、有疑。頼政男伊豆守仲綱、死生不詳。

とある、『愚管抄』卷五高倉院の条には、仲綱は自害、頼政は伏誅とある。

頼政、三井寺へ廿二日ニ参リテ、寺ヨリ六波羅へ夜打ち出ダシ立テ、アル程ニ、遅ク指シテ松坂ニテ夜明ケニケレバ、コノ事遂ゲズシテ、廿四日ニ宇治へ落ちサセ給ヒテ、一夜オハシマシケル。廿五日ニ平家押懸ケテ責メ寄セテ戦ヒケレバ、宮ノ御方ニハ、タゞ頼政ガ勢美二少シ、大勢ニテ馬筏ニテ宇治川ヲ渡シテケレバ、何ワザヲカハセン、ヤガテ仲綱ハ平等院ノ殿上ノ廊ニ入りテ自害シテケリ。賢野ノ池ヲ過ル程ニテ、追ヒ着キテ、宮ヲバ討取りマキラセテケリ。頼政モ討タレヌ。全て、頼政は、自害ではなく、討たれたとある。史料に記された頼政の死は伏誅なのである。それを、『平家物語』では自害とする。この歴史離れは、作者に何らかの意図があつたのことに見てよい。後に詳述する。

前述のとおり、摂津源氏でありながら平清盛に従つた頼政は、保元の乱・平治の乱においては勝利者方であつた。ひとまず「盛」である。平氏全盛の世にあつて、治承四年（二七六）に七十四歳で従三位に叙せられた。これも「盛」ではあるが、この叙位について九条兼実が日記『玉葉』に「第一之珍事也。是入道相国奏請云々」と記すように、清盛の推輓なくしてはありえなかつた程、頼政の昇進は、つまり「盛」は遅かつたのである。その頼政が、以仁王を奉じて総大将として反平氏の兵を挙げるのは、武人として一つの「盛」と見てよいが、直ちに敗北し、近江の三井寺へ、南都の興福寺へ、平氏の追撃を逃れる。「衰」である。その途次、平等院の合戦において決定的な敗北を被り、自害する。「衰」の極みである。史料に記されるようにたといその死が伏誅であつたにしても、「衰」の極みであることに相違ない。頼政は「盛」と「衰」を地で行く人物として語られている訳である。その「盛衰」の総決算とされるのが最期の件なのである。

『平家物語』の頼政最期の記事で作者が最も印象的に語り手に語らせたのが、頼政の「最期の詞」、つまり「埋木の」の辞世にまつわる件である。

頼政の家集『源三位頼政集』をはじめ諸歌集には、この歌は載らない。『平家物語』作者の創作歌であるのかも知れない。本稿の冒頭に示したごとき解をなし得るこの歌は、頼政詠歌として不自然ではないものとなっている。もちろん、周知のとおり、頼政は早く長承（二三三―二三四）の初度および後度の『為忠家百首』出詠に始まり、治承二年（二七六）の『賀茂別雷社歌合』や『右大臣家百首』に参加し、歌林苑において歌活動をした、歌人である。その和歌の力量は、例えば同時代の『歌仙落書』に、

風体比興を先としたるなるべしと見侍るに、また、けぢかく、速白きことども、時々あひ交じり侍るめり。

と評され、鴨長明が『無名抄』¹²に、源俊恵の言葉を引いて、

頼政卿は、いみじかりし歌仙なり。心の底まで歌に成り返りて、常にことを忘れず、心に懸けつつ、鳥の一声鳴き、風のそそと吹くにも、まして、花の散り、葉の落ち、月の出入り、雨雪などの降るに就けても、立ち居、起臥し、風情を回らさずといふことなし。実に秀歌の出でけむも、道理とぞ思え侍りしか。

と記すように、生前から評価が高い。勅撰集にも、在世中の『詞花集』¹³の、

題しらず 源 頼政

一七 深山木のその梢とも見えざりし桜は花に頸はれにけり

の一首の入集に始まり、総計五十九首が入集している。在世中の一首の勅撰集入集は、頼政にとつて、歌人としての「盛」であつたはずである。

その頼政に、『平家物語』の作者は、登場場面において必ず歌を詠ませ、あるいは連歌をさせる。事柄の事情は紙幅の都合で省略に従うが、前引の『詞花集』入集歌を巻第一「御興振」において詠ませ、巻第四「鶴」では、人知れぬ大内山の山守衛は木隠れてのみ月を見るかな

上るべき便宜無ければ木の下に椎（四位）を拾ひて世を渡るかな
の歌と、藤原頼長との連歌、

郭公名をも雲居に上ぐるかな（頼長） 弓張月の入るに任せて（頼政）
を載せ、巻第四「三井寺炎上」の章には、藤原公能との連歌、

五月關名を頭はせる今宵かな（公能） 黄昏時も過ぎぬと思ふに（頼政）
を載せる。『平家物語』の作者は、頼政を記す際には必ず歌人頼政を語り手に語らせるのである。「最期の詞」の歌である「埋木の」の歌が頼政の詠として的確であることと併せて、物語作者の手法は評価されてよい。

『平家物語』に語られる頼政の歌が全て述懐歌であることも、注目される。先に整理した頼政の「盛」と「衰」という主題に相応しい題材である。

因みに、後年、この頼政をシテとし、『平家物語』を本説としてその最期を能「頼政」に作詞した世阿弥は、ワキ旅僧に、頼政の死について、

いたはしや、さしも文武に名を得し人なれども、跡は草露の道の辺となつて、行人征馬の行方のごとし。あらいたはしや候ふ。¹⁴

と語らせている。「文武」つまり和歌と武術に長けた人として『平家物語』に語られている頼政であることを世阿弥は熟知し、述懐歌を詠む頼政という本説のままに「頼政」を作詞したのである。世阿弥は、『平家物語』が語る頼政の死の記事の部分主題を把握し、『平家物語』の貫一主題「世は無常である」との関連で能「頼政」に提示した、ということになる。

「死」は、一人の人間にとつて、「生」から「死」へという大きな「変化」である。「無常」即ち「転変」「不定」の最たるものである。『平家物語』に語られている頼政にとつて、その「死」はこの物語の貫一主題と関わるのである。『平家物語』の主要題材は、その主題を支える、人間の「死」である。それも、多くは平氏の武将の「死」である。ここに頼政の最期が語られるのは、人はみな死ぬ、源氏も死ぬ、ということを示す意図があつたと見てよい。尤も、『平家物語』において源氏の代表として死が語られるのは、後の巻第九「木曾最期」における木曾義仲ではあるのだが。

〈三〉

頼政の死の翌年治承五年（一一八五）、平氏の頭領清盛が病死する。平氏討伐のために拳兵した源頼朝派遣の義経軍は東海道尾張国まで進軍し、更に上京、寿永二年（一一八三）には、源義仲が北陸道を上京する。平氏一族は安徳天皇を奉じて西国へ落ちる。翌三年、義経率いる源氏軍が播磨国一の谷に平氏を攻める。一の谷の合戦である。『百鍊抄』同年一月二月に、

(一月) 廿九日己未。為討平氏、九郎(源)義経、下向西国、云々。
(二月) 八日丁卯。九郎、進飛脚云、自昨日寅時、至午時、合戦、攻落。將軍已下、多以討取之畢。

とある。この合戦は、『平家物語』には、重衡が源氏の生捕りとなり、教盛が熊谷直実に討たれ、知章が父知盛を落ち延ばそうとして討ち死し、清盛腹心の部下の越中前司盛俊が剛毅な憤死をするなど、平氏の武将が多く討ち死し、敗れた一族が瀬戸内を四国へ逃れるという件が語られている。

この一の谷の合戦において、清盛の末弟忠度が非業の死を遂げた。『平家物語』巻第九「忠度最期」の章に詳細に語られている。その語り出しは、

薩摩守忠度は、西の手の大將軍にておはしけるが、其の日の装束には、紺地の錦の直垂に、黒糸緘の鎧着て、黒き馬の太うたくまじきに鑄懸地の鞍置いて乗り給ひたりけるが、其の勢百騎ばかりが中に打ち囲まれて、いと騒がず、引かへ引かへ落ち給ふところに、爰に、武蔵国の住人、岡部六弥太忠澄、「好き敵」と目を懸け、鞭・鎧を合せて追つ懸け奉り、

である。紺地錦の直垂、黒糸緘の鎧、黒馬に鑄懸地の鞍と、壮年強者の出で立ちである。忠度は、歴史史料を探ると、延慶本が「齡四十計ナル人」とするように、当時四十歳、作者は忠度の装束について適切な描き方をしているのである。尤も、延慶本は、忠度は「ヒゲ黒」で、黒革緘の鎧、大中黒の矢、白葦毛の馬、小房の鞭と、更に壮年に相応しい装束を語っている。その忠度は、味方の勢百騎程に護衛されて、動揺せず馬を退げる。以下、追いついた岡部六弥太に、敵に背中を見せるとは卑怯、取って返せ、と声を懸けられ、自分は源氏であると欺こうとするが、忠度の鉄漿黒を見た岡部に「如何様にも、是は平家の君達にてこそおはすらめ」と見破られ、

岡部は忠度に「押し並べて、むずと」組む、平氏の百余騎は、これを見て、我先きにと落ちて行き、忠度はただ一騎残された、と語られる。続いて、薩摩守は、聞ゆる熊野育ちの大力、究竟の早業にておはしければ、六弥太を掴うで、

「憎い奴が。御方ぞと言はば言はせよかし。」

とて、六弥太を取りて引き寄せ、馬の上にて二刀、落ち付く所で一刀、三刀までこそ突かれけれ。……薄手なれば死なざりけるを、取りて押へて、首を掻かんとし給ふところに、六弥太が侍童、遅れ馳せに馳せ来たりて、急ぎ馬より飛んで下り、打刀を抜いて、薩摩守の右の肘を、臂の本より、ふつと打ち落す。

と、忠度が岡部を三刀打ち、首を取ろうとしたところへ、岡部の侍童が駆けつけ、忠度の右肘を打ち落した、と語り手は忠度の戦闘する様を語る。

薩摩守、「今はかう」とや思はれけん、

「暫し退け。最後の十念唱へむ。」

とて、六弥太を掴うで、弓長ばかりぞ投げ退けらる。其の後、西に向かひ、

「光明遍照十方世界、念仏衆生撰取不捨。」

と宣ひも果てねば、六弥太、背後より、薩摩守の首を取る。

岡部六弥太を跳ね退けた忠度は、極楽西方浄土への救いを願う最期の十念を唱えつつ岡部に討たれたと語り手は語る。忠度の死は討ち死であった。

「良い首討ち奉りたり」と喜ぶ岡部は、相手が誰かは判らなかつたが、籠に結び付けられたる文を取りて見れば、「旅宿の花」といふ題にて、歌をぞ一首詠まれたる。

行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の家主ならまし 忠度
と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ。

忠度は最期の歌即ち辞世の歌を身に携えて出陣していた、と語るのである。

その岡部が、忠度の首を掲げて、大音声で、勝ち名告りをあげると、

敵も御方も、是を聞きて、

「あな、いとほし。武芸にも歌道にも勝れて良き大將軍にておはし
つる人を。」

とて、皆、鎧の袖をぞ濡らしける。

と、人々が忠度の武芸と歌道について賞賛したことを以て、語り手は、忠度の最期について語り終える。尤も、延慶本は、岡部が忠度の首を取り、「大刀ノサキニ指貫テ、名乗レトイヘドモ名乗ラズ、是ハタガ頸ゾト云テ人ニミスレバ、アレコソ太政入道ノ末弟薩摩守忠度ト云シ調人ノ御首ヨト云ケルニコソ、始テサモト知タリケレ」とするのみで、「行き暮れて」の歌は示していない。しかし、歌人忠度に言及していることに違いはない。延慶本は別とし、「忠度最期」は歌説話として語られているのである。

『平家物語』に語られる「忠度最期」の章を辿ってみた。以上のごとく、作者は、忠度個人の「盛」と「衰」については頼政の場合程には記さない。それは忠度の盛衰が平氏一族の盛衰と概ね重なることが理由であろう。

ただ、『平家物語』の作者は、忠度を記す際も、頼政の場合同様、登場の度に歌人忠度を描く。武人忠度は最期の場面のみ描写するのである。

『平家物語』の作中場面・語り場面で忠度の名が最初に出るのは、前節に見た以仁王と頼政の敗北を語る巻第四「橋合戦」の章である。本拠地六波羅を出立して宇治に向かう平氏の一軍の武将の名を列挙して、語り手は、

大將軍には、左兵衛督知盛、頭中將重衡、薩摩守忠度、

と語るが、宇治の橋合戦での忠度の働きについては全く触れない。以仁王と頼政を匿ったとして平氏軍が三井寺を攻める巻第四「三井寺炎上」でも、

同じき五月二十七日、大將軍には左兵衛督知盛、副將軍には薩摩守忠度、都合其勢一万余騎、園城寺へ発向す。

と語るが、ここでも忠度の活動が描写されることはない。頼朝の軍を向え撃つべく東国へ向った平氏軍の軍勢の揃えの際にも（巻第五「富士川」、

副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒糸織の鎧着て、黒き馬の太く逞しきに、鑄懸地の鞍置いて、乗り給へり。

と、「忠度最期」の章に於けると全く同じ装束を描写するのみである。木曾義仲との対戦である北国の合戦に向かう平氏軍の揃えの折も、忠度は「副將軍には、薩摩守忠度」とその名を掲げられ（巻第七「北国下向」、篠原での合戦においては「搦手の大將軍には、薩摩守忠度」（巻第七「火打合戦」）と紹介されるが、その俱利伽羅谷の合戦においても、平氏軍は敗北を喫し、「平家の大勢、背後の俱利伽羅谷へ、我先きにとぞ落ち行きける」と語るものの、語り手は合戦における忠度の活動には言及しない。

作中に忠度が最初に登場するのは、巻第五「富士川」の章における語り手の回想話つまり語り場面の中におけるもの。忠度が或る宮腹の女房の許へ通っていた頃、その女房の局に先客として高貴な客人がいたので、忠度は、「野も狭にすだく虫の音よ」と、『新撰朗詠集』上に載る「かしかまし野も狭にすだく虫の音よ我だに物を言はでこそ思へ」の一節を口ずさむだけで、その局に寄らずに帰った、という逸話と、その話の後日譚、

其の後、此の女房、薩摩守の許へ、小袖を一重遣はすとて、千里の名残の惜しさに、一首の歌を書き添へて、贈られける。

東路の草葉を分けん袖よりも裁たぬ（発たぬ）袂の露ぞこぼるる

薩摩守の返事に、

別れ路を何か歎かん越えて行く関も昔の跡と思へば

「関も昔の跡」と詠める事は、先祖平將軍貞盛・俵藤太秀郷、將門追討の為に、東へ下向したりし事を今思ひ出でて、詠みたりけるにや、いと優しうぞ聞えし。

とである。これらは作中場面を離れて語り手が回想する歌人忠度譚である。

巻第七「忠度都落」は、作中場面である。忠度が、都落ちの際に途中から都へ引き返し、藤原俊成の邸を訪れ、詠み溜めておいた百余首の歌巻物を預け、勅撰集撰集の際に一首なりとも撰入していただければ幸いであると依頼しておいて、再び出立するという、周知の話。後年、『千載集』に、

さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながら（長等）の山桜かな

が詠人不知として入集したと語り場面で説明する。武人忠度は語られない。

巻第八「宇佐行幸」も作中場面である。寿永二年（二八三）、四国から更に九州太宰府まで落ちた平氏一族は、安徳帝の宇佐行幸に従駕する。九月十三夜の名月の夜、宇佐八幡において、後の月も涙に曇って清かには見えず、平安の都で見た内裏の月を思い返して、忠度は、

月を見し去年の今宵の友のみや（頼の宮）都に我を思ひ出づらん

と詠み、同行の平経盛・経正父子もそれぞれに歌を詠む。この作中場面においても、語り手は、武人忠度ではなく、歌人忠度の詠歌を語るのである。

『平家物語』に語られる忠度は、武人ではなく、歌人なのである。それが、その最期の場面に至って初めて、岡部と組み打ちする武人忠度が語られ、詠歌によってその名が判明した、と物語の語り手は語るのである。

その歌は「旅宿の花」という題詠歌、詠者は当然忠度とされるのであるが、歌の述主は或る旅人。桜の花盛りに旅つまり桜狩りで日が暮れ、もし桜の木の下を旅の宿としたならば、それは桜の花を宿の主人とすることになるのか、桜の木の下を宿としない私にとって、美しい花が宿の主人となることもない、という述主旅人の歌によって、この世における日暮れにな

り主人となる花もない、という述主旅人の旅の感慨ひいては作中人物である詠者忠度の心情吐露になっているのである。「旅」を人生の比喩とすると、この歌は、旅の歌であると同時に述懐歌でもあることになるのである。

後白河天皇皇子で御室である守覚法親王が、日記『左記』において、在世中の忠度について、兄平経盛と共に仁和寺の歌会の常連の「好士」つまり優れた歌詠みであると記す。勅撰集には、『千載集』に「詠み人知らず」として入集した前述の「さざなみや」の歌を始めとして、十一首が、没後、撰入されている。また、世阿弥作の能「忠度」では、ワキ俊成身内の僧が、中にも、この忠度は、文武二道をうけ給ひて、世上に眼高し。

と評している。忠度は歌人として力量の持ち主と評価されたのである。

その忠度には、周知の通り、家集『忠度集』があり、賀茂重保が『月詣集』撰進の際に三十六人の歌人に百首歌の提出を依頼したのに応じて提出したいわゆる寿永百首家集の一と考えられている。自撰家集である。その『忠度集』には、忠度が最期まで箆に着けて身を離さなかったという「行き暮れて」の歌は載らないが、後代の伝本の中に、巻末にこの歌を追加するものがあり、お茶の水図書館蔵成實堂文庫本では、俊成が『千載集』に撰入した「さざ波や」の歌の直前にこの「行き暮れて」の歌が増補されている。忠度最期の歌は、『平家物語』作者の創作であるかも知れないにも拘らず、後人は、これを忠度自撰の家集に追加し、増補し、忠度詠と認定しようとするのである。忠度は、生存中に歌人として評価され、没後も、勅撰集や能、あるいは家集における増補など、高い評価を受けたのである。

『平家物語』の作者は、宇治橋・三井寺・富士川・俱利伽羅谷等の合戦における忠度を大將軍・副將軍として記しはするが、その働きについては記さず、「富士川」の章における回想譚、「忠度都落」の章における俊成対

「面譚、「宇佐行幸」の章における詠歌譚、そして、「忠度最期」の章における最期の歌の話と、忠度を歌人として造型している。そして、その歌人忠度について、最期譚において敵味方に「武芸にも歌道にも勝れて」と高い評価をさせ、「敵も御方も」「鎧の袖を」濡らしたと語らせる。最期の場面の忠度が歌人として「盛」であったとする訳である。他は、俊成対面譚において、死後に勅撰歌人になる、と没後の「盛」を補うのである。

忠度の死も、頼政の場合と同じく、人の「生」から「死」への変化という意味で、「無常」を語る大きな題材とされている。その「旅宿の花」の歌も、「盛」と「衰」とを歌っている。双方共に、『平家物語』の貫一主題「世は無常である」を支えている部分主題の題材なのである。

〈四〉

『平家物語』の語り手の語る源頼政の死と平忠度の死とは、以上のごとく、題材もプロットの展開も、極めて類似するところが大きい。しかし一方で、相違するところもかなり大きい。それらについて、物語の貫一主題「世は無常である」という思想を鏡にして整理し、本稿のまとめとしたい。

頼政は源氏の武将、平氏討伐の拳兵をするが敗死する。七十余歳。忠度は平氏の武将、源氏の追伐によって敗死する。四十歳。その最期は、頼政は京都南郊宇治平等院で忠度は播磨国一の谷、死に際の装束は、壮年と偽った地味な色彩の甲冑鎧を着けた頼政と、壮年に相応しい紺色と黒色の甲冑鎧を着けた忠度、と語り手は語る。小異はあるが、その小異は、頼政と忠度という登場人物の歴史時間における実際の様との関連に起因する作者の書き分け、語り手に語らせた語り分けで、ほぼ同一と見て間違いない。

『平家物語』における頼政と忠度の最期譚は、作者が創り、語り手に語らせたもの、その類似と相違は主題との関連で作者が提示したはずである。まず、頼政は負傷し、自害を決意する。子息仲綱・兼綱と養子仲家・仲光父子が、討ち死にする。歴史史料には記されていないところまで、『平家物語』作者は、さもあつた事柄のごとく記す。頼政の死の露払いである。

一方の忠度は、源氏の岡部六弥太と組み討ちし、その侍童により右肘を落される。頼政は身内を失い、忠度は右腕を失うのである。同じくその死に先立つ事柄の記述であるが、頼政と忠度の描写と叙述には大異がある。

二人の最期の場面の叙述には、更に大きな相違がある。頼政は、部下の渡辺長七唱に介錯せよと命令するが固辞され、西方浄土を願って最期の十念を唱え、「埋れ木の」の歌を詠んで自害する。忠度は、先ず最期の十念を唱え——その念仏の文句さえ示される——、敵の岡部に討たれ、その後、

忠度の最期の歌「行き暮れて」を岡部が見出だす。前述のとおり史料の殆どが頼政の最期を「伏誅」とするものを、『平家物語』の作者は「自害」と創っている。『平家物語』の作者は、物語では数巻も後の話になる忠度の死の誅伐とはその死に様を変えることを目論んだのである。少なくとも、二人の死が異なつた様相で記述される結果になつていることは間違いない。

二人の最期譚に歌を配すること、頼政が文にも武にも勝れ和歌を「強ちに好いたる道」とすると評した件と忠度が「武芸にも歌道にも勝れ」た人であつたという歌人評を添える件は共通しているが、頼政は最期に歌を詠み、忠度は前以て詠んだ歌を携えていたと、大きな差異が構えられている。

その両人の最期の歌をいま一度吟味してみる。頼政の歌は、
埋木の花咲くこともなかりしに実(身)のなる果てぞ悲しかりける
である。この「花」は結実を見る普通一般の植物の「花」、咲き、実が成ることでは「盛」となる。しかるに、「埋木」は花の木としては「衰」を示

す。「花咲くことも」ない、つまり「盛」がない。一方、忠度の歌は、

旅宿の花

行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の家主ならまし

であり、「花」は桜、はかなく虚ろい易い。無常を暗に示している。「行き暮れ」た人生において、はかなく散るはずの盛りの「花」の木を宿とすれば、「花」が一夜の宿の家主となるう、しかし、「宿」としないのであるから「花」が今宵の家主になることはない、と歌わせているのである。

語り手は、頼政と忠度の最期を共に歌を核として語る。歌人でもある両人の最期として自然な語り方であるが、それを、全く異なった「埋木の花」「桜の花」という題材の最もそれらしき、本意を歌った歌で語るのである。

頼政の死と忠度の死とは、『平家物語』においては、極めて似た、共通点の多い素材・題材によって語られている。二つの話のプロットの展開もほぼ同じである。全て、二人の「死」という、人間における「無常」の最も大きな表出材料なのである。しかも、兩人とも極楽西方浄土を願って最期の十念を唱えた、とする。当時の武人として当然の念仏であるにしても、無常の世であるからこそ浄土での「救い」について語り手は語るのである。

しかし、その同一の素材・題材を語るに際して、語り手は、そしてその語り手を動かす作者は、大きな違いのあることを、明確に示している。

一方の頼政は「自害」であったとする。史料に記される限り、伏誅が事実であるにも拘らず、である。他方の忠度は「討死」である。武人であり歌人である二人の死は、全く異なるのである。物語の作者は、「異なった死」を語り手に語らせたのである。歌人二人の残した最期の歌も、同じく「花」を素材・題材とする歌ではあるが、頼政の歌は、「埋木」の「花」は咲くこともない、自分も、「花」つまり「盛」がなかった、「実」つまり結果とい

う「盛」のない「身」であり「我が身」は悲しい、哀れである、という述懐の歌である。忠度の歌は、花の「盛り」に、「花」の木の蔭を宿とするなら、その「花」が自分に一泊の泊りを許す家主になるのにと、「盛りの花」を素材・題材とする。頼政の歌とは全く異なるのである。尤も、忠度の歌は、人生に「行き暮れて」いる自分は、もし「盛りの花」に寄り添っていれば、その「盛りの花」が一時であつても拠り所となる家主になつたであろうに、と裏に述懐を含む歌であることは言を俟たないが。

二人の歌が述懐の意を備えるのは、「死」つまり人生の最期の折の歌として極めて自然であり、『平家物語』の作者は、そのことを十分理解して語り手に語らせたと見てよい。しかし、その述懐を歌う素材・題材の「花」は、頼政の歌と忠度の歌とは、全く異なっているのである。武人であり歌人である二人の死であるが、その死に様は「一定」ではないのである。

以上に見た通り、『平家物語』に語られる頼政の最期譚は、その話自体が「世は無常である」という部分主題を提示している。また、忠度最期譚も、同様に、その部分主題は「世は無常である」という作者の持つ思想である。共に、部分主題が『平家物語』の貫一主題を支えているのである。

それに加えて、似た素材・題材を語る兩人の最期話を比べてみると、同一の事柄も多いが、極めて大きな相違がある。二人の死の表現は、同一ではないのである。その最たるものが、一方は自害であり一方は伏誅であるとする、歴史離れを含む「死に様」の描写と、この話の核とも言える和歌、頼政の「埋木」の歌と忠度の「行き暮れて」の歌の表現と主題の差異である。「埋木」の歌も「行き暮れて」の歌も、双方共に頼政詠・忠度詠という保証がない、『平家物語』作者のこの物語における創作の可能性が高い歌であるだけに、両首の相違は、注目されるのである。武人の最期の

歌に大きな違いがある、「一定」ではないとする。「世は無常である」という部分主題をも貫一主題をも支える、和歌の表現なのである。

『平家物語』の主題は、物語の冒頭、「祇園精舎」の章の一節、

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯す。

に示されている、「世は無常である」という作者の持つ思想である。『平家物語』が創られた頃の人々が等しく持っていた思想である。この思想は、一言では言い尽くせない、深く且つ広い考えの広がりや深まりがある。しかし、「常無し」、つまり「ありとあらゆるものが移り変わって、少しもとどまらないこと」「変化変遷すること」という原義は、古来、仏教諸宗派や論者を通じて変わらない。その主題が、『平家物語』のどの章どの記事を取り上げても、提示されているのである。『平家物語』は本稿に見た通り、「世は無常である」という主題の様々な話を、平氏の登場からその滅亡までの諸々の出来事を、歴史離れを行い、歴史そのままを語り、それを繰り返しつつ語り、物語の貫一主題「世は無常である」を提示しているのである。これが、『平家物語』の主題「世は無常である」の表出方法なのである。

【注】

- 1 『平家物語』の引用は拙著『流布本 平家物語 一〜四』による。
- 2 「語り手」「作者」の概念は小西甚一氏「批評の文法」(『国文学解釈と鑑賞』昭和四二年五月)の定義による。
- 3 「主題」の概念は小西甚一氏「批評の文法」(『国文学解釈と鑑賞』昭和四二年五月)の定義による。
- 4 延慶本『平家物語』の引用は北原保雄氏・小川栄一氏編『延慶本平家物語 本文編 上・下』による。
- 5 『源平盛衰記』の本文は『有朋堂文庫 源平盛衰記 上・下』による。

6 『百鍊抄』の本文は『新訂増補 国史大系 百鍊抄』による。

7 『玉葉』の本文は国書刊行会刊『玉葉』による。

8 『山槐記』の本文は『史料大成 山槐記』による。

9 『愚管抄』の本文は『日本古典文学大系 愚管抄』による。

10 歌集の本文は、『新編国歌大観』により、表記を私意により訂して引く。

11 『歌仙落書』の本文は『中世の文学 歌論集 一』による。

12 『無名抄』の本文は『日本古典文学全集 歌論集』による。

13 能の本文は『日本古典文学大系 謡曲集 上・下』による。

14 「語り場面」「作中場面」の概念については、拙著『流布本 平家物語 一』の「解説」を参照したい。

15 「述主」の概念は小西甚一氏『日本文学史』における定義による。

16 『左記』の本文は『史料大成 左記』による。

17 岩城賢太郎氏「謡曲〈忠度〉論―文武二道」の武人シテ忠度の造型―(『筑波大学平家部会論集 八』平成二二年一月)に「文武二道」について詳しく説得力のある検討がある。

18 「寿永百首家集」については、森本元子氏・松野陽一氏・井上宗雄氏等のご見解に従う。

19 拙稿『忠度集』諸本の奥書識語に見える自筆本伝承と俊成対面伝承―『平家物語』謡曲「忠度」「俊成忠度」との関連において―(『中世重記の展望』平成一八年七月刊)において指摘した。

20 中村元氏著『仏教語大辞典』の「無常」の項。

【付言】平成十八年十月に、国立政治大学外国語文学院日本語学系より大学院「日本古典文学研究」の集中講義のお招きを受け、二週間、訪台した。予備日に、同大学において本稿と同題の公開講演の機会を与えられた。本稿はその講演の礎稿を骨子とし、その後の考察を大幅に補訂したものである。

講演と集中講義の機会を与えて下さり、講演の進行役を勤めて下さった国立政治大学日本語学系主任于乃明教授、訪台の橋渡しをして下さった筑波大学名誉教授平岡敏夫先生と政治大学日本語学系黄錦容教授、講演の際に質問に立つて下さった黄教授・小林幸夫副教授・吉田妙子副教授・慈濟大学助理教授内田康君・政治大学大学院生林怡君さんに深甚の謝意を表す。

(いぬい よしひさ 筑波大学 名誉教授)